

保護者から見た放課後子ども教室の有用性

佐藤 哲康*・生駒 忍**・蓮見 元子***
北原 靖子****・川嶋 健太郎*****

Usefulness of the After-school Room by parent's requests

Tetsuyasu SATO, Shinobu IKOMA, Motoko HASUMI,
Yasuko KITAHARA, Kentaro KAWASHIMA

要 旨

本研究では放課後子ども教室の有用性について、学童保育と放課後子ども教室を併用している児童の保護者の語りを通じて再検討した。その結果、保護者が外側から評価する良い点は子どもが内側から評価する改善点であり、立場の違いから放課後子ども教室の有用性の評価に齟齬が生じていた。また放課後の居場所は保護者が選ぶものではなく、子ども自身が選んでいることが明らかになった。さらに小学生の多くは放課後に習い事や部活動をしており、時間を合わせて遊ぶことができる相手が少なくなっている。その点については放課後の居場所と遊び相手を提供する「放課後子ども教室」の有用性が明確にあることが明らかになった。

キーワード：放課後子ども教室、学童保育利用者、有用性の再検討

問題と目的

近年の学校現場では子どもたちは異年齢の子どもとの関わりを持つ機会が少なくなっており、それが子どもたちの社会性の欠如や耐性の低下の一因になっているという指摘もある。また少子高齢化社会では地域や家庭のつながりが希薄になり、それに伴い様々な子育ての困難さの問題が生じてきている。さらに地域の教育力の低下が指摘されて久しいが、同時に地域の教

*助教 臨床心理学

**非常勤講師 認知心理学

***教授 発達臨床心理学

****教授 発達心理学

*****尚綱大学短期大学部

育力の活性化を目指す取り組みも各地で展開されるようになった（森下・松浦，2011）。そうした異年齢の子ども同士の交流の機会減少，子どもを巻き込んだ犯罪事件の増加による地域の安全性の低下，子育てと仕事の両立を支援するために2007年，放課後子どもプランが創設された。

放課後子どもプランは文部科学省の「放課後子ども教室推進事業（放課後子ども教室）」と厚生労働省の「放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ）」の一体化を図る展開をしている。地域社会の中で，放課後や週末に子どもが安全で安心して健やかに育まれることを趣旨として，全国でそれぞれの特性を生かした取り組みが始められている。乳幼児期および児童期の子どもたちが育つ場として家庭，保育所や幼稚園，学校，地域などが考えられる。これらの場は子どもが対人的側面，情動的側面，あるいは認知的側面を発達させる重要な環境として機能すると考えられる。「放課後子ども教室」は取り組みの一つとして，放課後の居場所を作り，生活がより実りあるものにするために行われている事業である。地域の住民や地方自治体の協力を得て，児童に体験や交流活動を提供する場として多くの自治体が設置している。

子どもの身体的な安全の面ばかりではなく，精神的な面で安らぎの空間になっているかどうかについても配慮する必要がある。また保育が必要な児童の受け入れ年齢は小学校低学年・中学年が一般的である。高学年も安全で適切な環境を与えられるべき年齢であるにもかかわらず放課後の居場所について対策が遅れている（赤津・金谷，2009）。

低学年児童が小学校で過ごす時間は年間約1100時間であるのに対して学童保育で過ごす時間は約1600時間になる（全国学童保育連絡協議会，2007）。請川（2010）は放課後子どもプランを学校教育ではなく社会教育として位置づけ，小学校を一元化して活用するメリットとして「児童の安全確保」と「学校教職員との連携」を挙げており，学校外の施設を利用した時よりも大きいと説明している。一方で猿渡・佐藤（2011）は，学習の場であり基本的には管理された空間である学校の教室を活用することは，自由な活動の場としての居場所づくりという観点において必ずしも適切ではない。学校施設を活用することで，学校にネガティブな意識を持つ一部の子どもが参加を拒絶する危険性があると述べている。赤津・金谷（2009）は，保育は必要な者を対象にした従来の学童保育は徐々に全児童対策に吸収される傾向にあることを指摘している。

単に物理的な空間ではなく，安心感や開放感，存在感といった肯定的な感情を伴う空間である「居場所」には他者との豊かな関わりが特に重要とされている。それは人が他者との関わりの中で自分の存在や位置を確認していくものであり，自分と他者とがお互いに認め合い受けられることで安心感や存在感を持つようになるからである。

また放課後の居場所づくりで放課後子ども教室と類似した取り組みに学童保育がある。現在、「学童保育」という名称は一般的に使われているが、公的には1997年の児童福祉法改定以来、事業は「放課後児童健全育成事業」、対象となる児童は「放課後児童」、学童保育は「放課後児童クラブ」と呼ばれ制度化されている（赤津・金谷，2009）。

また、2006年に60年ぶりに改正された教育基本法では「学校、家庭および地域住民その他の関係者は教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚すると共に、相互の連携および努力に努めるもの（13条）」とする教育は学校のみで行われるものではないことが明示された。

さらにこの改正をうけて、社会教育法は国及び地方公共団体の任務として、学校教育との連携の確保に努め、家庭教育の向上に資することとなるよう必要な配慮をするとともに、学校、家庭及び地域住民その他の関係者相互間の連携及び協力の促進に資することとなるよう努める（3条）と2008年に一部改正した。児童・生徒が放課後と週末に安全に過ごせるように、余裕教室を活用したり、遊び場や生活の場を確保したりして、地域の人々の協力を得ながら活動に取り組んでいる。

本研究の目的

事業が始まり5年が経過した放課後子ども教室の設置効果、児童や保護者（利用者側）から見た満足度、自治体職員や運営スタッフ（提供者側）から見た評価などについて定期的に評価を行い、より良いサービスを提供するためにも必要な運営の見直しと改善を再検討する時期である。蓮見・北原・川嶋・浅井（2010）は放課後子どもプランの運営について評価する指標を作成している。学童保育と放課後子ども教室は、設置や運営の方法、利用条件など異なる点も多く、放課後子ども教室を事業評価する上で、学童保育との比較は必要であると思われる。また双方の比較を通じて、連携がより密になることが望まれる。

本研究では放課後子ども教室の有用性について、現在学童保育と放課後子ども教室の両方を併用している児童の保護者の語りを通じて再検討した。

方法

研究協力者

関東近郊で首都圏通勤圏内に位置するA市在住の学童保育と放課後子ども教室の両方を併用している児童の保護者4名

調査内容と分析手続き

調査データの収集は4名の保護者とインタビュアー（共同研究者）が一同に集まり、半構造化面接法によるグループインタビューを実施した（所要時間1時間）。グループインタビューには集団力学、参加者同士の相互作用を利用してデータを収集し、最終的に仮説やモデルを生み出すことができるという利点がある（田垣，2007）。保護者には参加者同士の自由で率直な語りを奨励し、1）「放課後子ども教室事業があつて良かった点、助かった点」、2）「放課後子ども教室事業の仕組みや利用しての問題点や改善点」、3）「放課後子ども教室事業への今後の期待」の3点について調査を行った。グループインタビューの会話は参加者全員の許可を得て、ICレコーダーに録音した。

インタビュー面接終了後、録音したインタビュー会話から逐語記録を作成し、上記の調査内容が明確になるように質的データ解析ソフトを用いて、会話をコーディングしながら分析と整理を行った。

結果と考察

会話の内容を分析し、保護者から見た放課後子ども教室の有用性について検討した結果、以下のような語りが得られた（会話中にある《 》は筆者が内容を補足したものである）。

1. 放課後子ども教室の良い点

放課後子ども教室の良い点として、「学童保育では体験できない魅力的な企画があること（①魅力と興味にあふれた企画と体験）」や「普段遊んでいない友だちや年齢の異なる友だち、地域の大人とも接触ができるし、顔を憶えてもらえること（②新しい人間関係へのつながり）」、「学童保育とは違う③自由な雰囲気と縛られないイメージがあること」、「仲間を見つけ、学校で安全に遊ぶことができる空間である。また保護者の目の代わりになり、安心して遊ぶためにも面倒な手続きは仕方のないルールであること（④安心・安全な環境）」の4点が挙げられた。

良い点①：魅力と興味にあふれた企画と体験

【保護者U】 やっぱ親から見ると何か魅力的な工作があつたり、行ったらいいのと思うんだけど、なかなかね。きっかけがあるのか、《企画が》楽しかったなつてきっかけがあるのか、なかなか足が重いですね。遊びに行った時に、楽しかったなつていう思いが持ち帰れば、また次につながるのかなつて。

保護者から見た放課後子ども教室の有用性

良い点②：新しい人間関係へのつながり

【保護者 O】 普段遊んでいるお友だち以外にも接触ができて、新しいお友だちができるところで、今日は誰と遊んだって話を結構してくれるので。行っている時は楽しく過ごせているので、そういう面は良いかなって。《学童保育は》年齢など、やっぱり決まっている。決まった子がいるので、もうずっとそれが、1年生の時からだいたい同じ顔ぶれっていうのがあるので。その中でも楽しいけれども、また違った、全児童対象だから、いろんな普段接触のできない子とも接触ができたりというのがあるので違った意味で新鮮。

【保護者 I】 学童だと同じメンバーで、スタッフの先生も同じなんですけど、放課後子ども教室だと地域の人も来ているのかな。それと年齢が、学童だと6年生とかもういないんです。5年生も一人っていう感じで。上の子、自分より年上の人と関わること、あんまりないんで。それで年上のお姉ちゃんがいるっていうことで、うちの子の場合は《放課後子ども教室に》最近行くようになったし、そこにいる年上の人たちと遊ぶのをすごく喜んでいるし、学童よりも良いと言っている。新しい人とのつながりを喜んでいる。

【保護者 U】 いろんな人に顔を覚えてもらえるかなっていうのがあって。《放課後子ども教室に》遊びに行くと、ふれあいが広がるといろんな人に覚えてもらえるかなっていうのがあると思います。

良い点③：自由な雰囲気と縛られないイメージ

【保護者 M】 うちの子じゃなくて、全体を見れば、やはり放課後子ども教室はやっぱり自由な雰囲気があって、学童とは違う縛られない自由があるのかなってイメージがする。外から見た感じしか私にはちょっと分からないんで。[中略] やっぱり学童はもう生活の場なので、子どもが安心していられるみたいなんですよ。

良い点④：安心・安全な環境

【保護者 O】 うち是一人っ子なんで、逆に放課後子ども教室みたいな所があると、お友だちがいるって感じで。土日とか学校がお休みの時は、誰も遊ぶ子がいないと「放課後子ども教室行こうかな」っていう感じで助かっている。やっぱり学校の敷地なので安全だし、保護者としては、やっぱり安心できる。どこ行ったのか分からないよりも、放課後子ども教室に行くって言えば、じゃあ学校にいるんだなって。

【保護者 I】 面倒くさい、色々っていうのは逆に考えると、たぶん安全。どこにいつもいるかっていうことで、私が見られないから。放課後子ども教室に行くって言う、「いいよ、お弁当作るね」って。友だちの家に行くって言う「何をしに行くの？」みたいに、ちょっと不安なんです。その点では、何をしている、中で何やっていると私は全く分かっていないですけど、何か安心なんです。自分の目の代わりになってくれているので、それは続けてほしいかな。

【保護者 O】 放課後子ども教室に行くって言えば、「いいよ、いいよ」って親が安心できるので。子どもが嫌がる、ちょっとどこで遊んでいますとか、マグネットを移動したりっていうのは、もう安全を確保の上でどうしても仕方ないルールだと思う。

こうした良い点は子どもの意見よりも、むしろ保護者の立場から出された感謝である。楽しい体験が放課後子ども教室の次の利用につながるきっかけになること、小学校の全児童が利用対象であるから参加する児童が決まっておらず、上級生と関わることができる喜びがある。放課後を決まって過ごす学童保育は当たり前の居場所、生活の場であり、遊びに行く場所ではなく、必ず行く生活の一部であると区別して考えているようである。

2. 放課後子ども教室の改善点

放課後子ども教室の改善点として、「興味があること、やりたいものには参加したいが、興味のない企画には参加したくないこと（①興味を引かない企画）」、「周囲の様子を見てから行く内気な性格な子どもや遊ぶ相手がいない子どもには②入りづらい雰囲気であること」、「名前や居場所を知らせるのは億劫で面倒だから行くのが嫌なこと（③面倒な参加手続き）」、「学童保育に比べて校庭を利用できる時間が少ないこと（④校庭利用の制限）」の4点が挙げられた。

こうした改善点は保護者の苦情というよりも、むしろ当事者である子どもの立場から出された苦情である。学童保育と放課後子ども教室を併用している子どもにとって、他方の利点は他

改善点①：興味を引かない企画

【保護者 M】 あんまり利用は、《放課後子ども教室を》最近利用はしてないって言っています。子どもは学童の方が良いっていうことで。ただ、チャレンジタイム^(※1)っていうか、何か興味があることがあれば、参加したいかなって思う時あるみたいですけど、最近あんまり放課後子ども教室の方に行っているとは聞いてないですね。

(※1) 放課後子ども教室が実施するレクリエーションの呼称

【保護者 O】 できた当時は《放課後子ども教室に》結構行っていた。最近は、平日は部活があったりするのでもう行けないのと、あとは夏休みはお友だちが行ったりとかすると一緒に。何か、友だちに結構左右されたり、何かやりたいものがある時に行くぐらいで、最近は減っているかな。

改善点②：入りづらい雰囲気

【保護者 I】 子どもの性格によって、やっぱり活発な子は《放課後子ども教室に》行くけど。ちょっと様子見の、ちょっと入りづらい雰囲気とかあるのかなと。活発な子たちは異年齢でもコミュニケーションが取りやすい子は入りやすくて。ちょっと静かにして、周りを見てからコミュニケーションを取っていくタイプにとっては入りづらいのかなっていうイメージです。

【保護者 U】 大人しい子なんですけど、やっぱり遊ぶ相手がいないからと言っていた。自分の友だちがいない、自分からは友だちを作るタイプじゃないので。やっぱり遊べる相手が確保できてないと行かない。あとはもう第一印象ですね。第一印象でもう面白くないからもう行かないっていうので。

保護者から見た放課後子ども教室の有用性

改善点③：面倒な参加手続き

【保護者 O】 子どもが面倒くさがり屋な所もあるので、放課後子ども教室に行くと、名札や自分がどこで遊んでいるのかわらせるのかな？それが、次に移動とか、それがちょっと面倒くさいようで。書いてたりとか、来た時間、帰りの時間、とにかく面倒くさがり屋なので。億劫がってやらないから、行くのが嫌とか。もうちょっとスムーズに改善されれば行くのかなって。

改善点④：校庭利用の制限

【保護者 O】 校庭を利用できるのが少ないのかな、放課後子ども教室は。学童は比較的校庭で遊べる時間、隅っこの方でも遊べたりするけれど、学童の子たちが遊んでも放課後子ども教室の子たちは外で遊べないとか。そういう時間があると、うちも活発なので「校庭で遊べないんだったら行かない」とか。

方の欠点として評価される。「面白くないからもう行かない」、「友だちが行くから一緒に遊びに行く」、「手続きをもうちょっと簡略化してスムーズに改善されれば行く」など、学童保育が嫌いになったら放課後子ども教室を利用し、放課後子ども教室が嫌いになったら学童保育をまた利用するのかもしれない。それは保護者の希望で居場所が決まるのではなく、子どもが過ごしたい場所を居場所として選択しているのではないだろうか。

3. 放課後子ども教室への期待

放課後子ども教室への期待として、「魅力のあるチャレンジタイムや体験の回数を増やせば参加者も増えること（①参加を促す興味深い体験の計画）」、「地域の人たちと一体となって安全を確保すること（②地域連携と安全確保）」、「日没は、特に冬は子どもたちが利用できる時

期待①：参加を促す興味深い体験の計画

【保護者 M】 チャレンジタイムが月1回しかないんです。もっとチャレンジタイムがいっぱいあれば違うと思う。子どもが「行ってみようかな」って。それは物理的に無理なのかな、スタッフを揃えなきゃいけない。

【保護者 O】 チャレンジタイムもやっぱり、魅力があれば子どもが食いつくと思う。すごくチャレンジタイムで良かったのが、年末にしめ縄としめ飾りを縄で実際に子どもが編んで飾りを作ったんですね。去年、学童から放課後子ども教室に行って作ってきて、すごく嬉しくて、自分も嬉しくて飾っちゃったんですけど。何か、そういう普段体験できない、なかなか体験できないことをやらせてくれるので、親としては、いろんな書道、習字だの、琴だのあるからどんどん行ってと思うんだけど、なかなか時間、限られた時間で合う合わないとか、部活があったりとか、高学年になってくると利用する時間も減ってくるので。

期待②：地域連携と安全確保

【保護者 O】 他の地域ではもっと地域の人たちが一体となって安全を確保する上で、5時くらいまで開設して地域の人と一緒に帰る自治体があるそうです。そういうところがあると高学年の子たちももうちょっと利用できるのかなとか。それは地域との繋がりとかあるのでなかなか難しいかなと思うんですけど。

期待③：利用時間の延長

(開室時間がもうちょっと長い方が使い勝手が良いと?)
【保護者 O】 特に冬は、日没ってというのが短いからちょっと残念かなって思いますね。
(暗くなった時にはボランティアか何かいないといけないですか?)
【保護者 O】 サポートをする人員もないと、やっぱりなかなか難しいと思うので、仕方ないかなと思いますけど。

期待④：子どもに向けた PR

【保護者 U】 《放課後子ども教室の》お手紙を子ども向けにっていうのは、どうかと思います。大人向けの今の手紙じゃなくて、子どもが自分で予定を組めるような、スケジュールを組めるような内容の、一年生まで分かるような。大人向けだなって思いますね。子どもが分かっていたら行くんじゃないかな。
【保護者 O】 《担任の先生が》何かこういうのがあるからどう? とか誘ってくれているのもあるみたいですね。

間が短いから残念なこと (③利用時間の延長)、「子どもが自分で予定を組めるように案内の手紙を子ども向けに作成すること (④子どもに向けた PR)」の4点が挙げられた。

こうした期待は前述した保護者からの感謝と子どもからの苦情から生まれたものである。限られた人的資源と時間では困難であることを承知のうえで、地域との繋がりやスタッフを充実してほしいこと、高学年のために利用時間を延ばすことを期待している。また担任教員がこれまでと同様、放課後子ども教室への参加を誘ってくれることも参加へとつながる活動の一つと言えるだろう。

4. その他の特徴

放課後子ども教室がもたらすその他の特徴について、「(母親自身が)自分の仕事ができおり、一人の人間として働いていること (①母親自身の社会参加・職場復帰)」、「学童以外の子どもと約束ができない、声をかけられないこと (②学童利用者以外との交流)」の2点が挙げ

保護者から見た放課後子ども教室の有用性

その他①：母親自身の社会参加・職場復帰

(子どもに放課後をどんな風に過ごしてほしいと思いますか?)

【保護者 I】 近所に出れば誰かがいて、年上の子もいて。年上になれば、今度は自分が年下と遊ぶ環境で育ったので。その現在版みたいなものを学童と放課後子ども教室で、今やってもらっているなって。そして、自分も自身の仕事ができている。母親だけじゃなくて、仕事の中では一人の人間として働けているのは忙しいですけど、放課後子ども教室ができてからちょっとそういうことができているんじゃないかと勝手に自己満足している。

その他②：学童利用者以外との交流

【保護者 M】 やっぱり学童は生活の場なので、子どもが安全に楽しく過ごせれば、それで良いんじゃないかって。異年齢、異学年の子どもたちと仲良く過ごせればそれでいいかな。学童以外のお子さんと遊びたい時には、普段約束がやっぱりできないので、それがちょっと可哀そうかなって思いますね。遊びづらいつらと言うか、やっぱり約束して一度家に帰ってどこかで待ち合わせしてってやっていたと思うんですけど。

【保護者 O】 <昔は>親がいなくても、子どもは帰ってきて友だちと外で遊んで、時間なったら帰ることが普通にできていたんだけど。今は習い事している子どもさんも多くって、やっぱり遊ぶお友だちも少ない。普通に学校が終わって帰ってくる日でもなかなか遊べなかつたりするので、それは何かちょっと子ども可哀そうかなっていう気がしますね。「学童、別に行かなくてもいいんだよ」、「学校終わってお友だちと遊びたければ遊びに行ってもいいんだよ」って。いいんだよって言っても、友だちとうまく約束ができないから、「じゃあ、学童にいる」っていう感じなので、ちょっと可哀そうかな。自由を束縛しているような感じで。

【保護者 U】 生活内容は満足しています。何かトラブルがあったとしても、先生がいるので安心してお任せしています。やっぱり学童以外の子との交流が薄くなっているので、自分で約束して外に行くとか、土曜日、日曜日もできない状態。

(自分から約束をして、どんどん遊びに行行って欲しいと思いますか?)

【保護者 O】 <学童に>行っていない子たち、普段から行っていないで普通に帰る子たちは、やはりその中でもう普段から接触しているから、反対に「あの子は学童だから」って声をかけないこともある。

られた。

男女共同参画の現代において、社会参加や職場復帰は母親自身の幸福感を高める。元来、学童保育は夫婦共働きの家庭を支援する目的で設置された育児支援事業であることから、放課後子ども教室もそうした事業の一役を担う働きをしている。

その一方で学童保育を利用していることで、交友関係が学童保育利用者のみに限られてしまい、その他の子どもと放課後遊ぶ約束を取りつけようとしても交流がなく、遊ぶことができない

い。「あの子は学童保育に行くから、声をかけるのをやめよう」と約束を遠慮されている。

結論

現在、学童保育と放課後子ども教室を併用している児童を持つ保護者の二つの事業を比較したグループインタビューから得られた客観的な評価によって放課後子ども教室の有用性が明らかになった。放課後子ども教室の良い点は子どもを送り出す保護者からの感謝であり、改善点は放課後子ども教室を利用する児童からの苦情であるように思われる（図1）。外側から評価する保護者と内側から評価する児童との立場の違いから放課後子ども教室の有用性について評価に齟齬が生じていた。新しい人間関係へのつながりと自由で縛られない雰囲気は入りづらい雰囲気に、保護者にとって「安心・安全」を得るための手続きは子どもにとっては不便で面倒なものであった。

また放課後の居場所は保護者が選ぶものではなく、子ども自身が選んでいることが明らかになった。さらに小学生の多くは放課後に習い事や部活動をしており、時間を合わせて遊ぶことができる相手が少なくなっている。その点については放課後の居場所と遊び相手を提供する

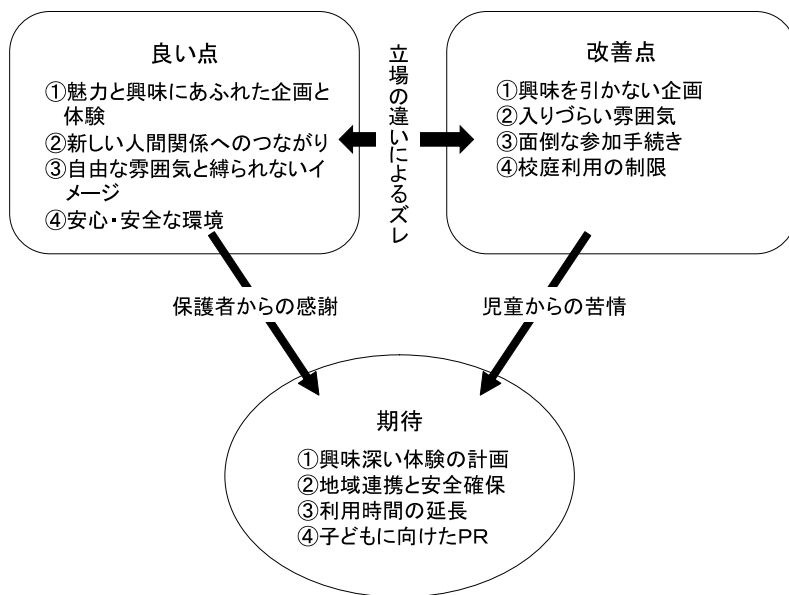


図1 放課後子ども教室の有用性

「放課後子ども教室」の有用性が明確にあることがインタビューから明らかになった。

さらに放課後子ども教室は子育てと仕事の両立、母親自身の社会参加と職場復帰を支援する役割も果たしていることが示された。今後は保護者、子どもそれぞれの立場から放課後子ども教室の評価をすると共に、運営にかかわるスタッフ自身の成長と充実感、生涯学習と社会貢献の役割についても検討する必要があるのではないだろうか。

引用文献

- 赤津純子・金谷有子 (2009). 学童保育における子どもの生活の発達の研究 埼玉学園大学紀要人間学部 篇 9, 275-281.
- 蓮見元子・北原靖子・川嶋健太郎・浅井義弘 (2010). 放課後子どもプランの実際の運営についての自治体レベルでの評価指標作成等に関する研究 こども未来財団児童関連サービス調査研究等事業報告書
- 森下智広・松浦善満 (2011). 放課後の子どもと「放課後子どもプラン」の課題—橋本市における実態調査結果の考察— 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 21, 135-141.
- 猿渡智衛・佐藤三三 (2011). 放課後子ども教室事業の現代的課題に関する一考察—子どもの社会教育の視点から— 弘前大学教育学部紀要 106, 47-61.
- 田垣正晋 (2007). グループインタビュー やまだようこ編 質的心理学の方法—語りをきく— 新曜社 pp. 114-123.
- 請川滋大 (2010). 子どもの居場所としての「放課後子ども教室」—その現状と課題— 日本女子大学紀要 家政学部 57, 22-33.
- 全国学童保育連絡協議会編 (2007). よくわかる放課後子どもプラン ぎょうせい